

葉靈鳳の短編小説「麗麗斯」解釈の可能性
—アナトール・フランス「リリトの娘」との類似性と相違点について—

石井洋美*

A possible interpretation of Ye Lingfeng's short story "Lilith"
Similarities and differences between "Lilith" and Anatole France's
"The Daughter of Lilith"

ISHII Hiromi

Abstract

"Lilith" is a short story written by Ye Lingfeng in 1933. In myths, legends, and western literary traditions, Lilith is often described as an evil woman. However, Ye Lingfeng considered Lilith's story to be extremely beautiful. In this novel, Ye Lingfeng projected the heroine into Lilith. The heroine is living with enormous stress in Shanghai, but she is still beautiful, pure, and proud. Ye Lingfeng sympathized with her.

Ye Lingfeng's "Lilith" has many similarities to Anatole France's "The Daughter of Lilith". It shows that Lilith described by Ye Lingfeng is a figure that was inspired by "The Daughter of Lilith" and shaped. Through this novel, Ye Lingfeng expressed the beautiful state of the two characters in love that he longed for.

Keywords : Ye Lingfeng, "Lilith", Anatole France, "The Daughter of Lilith", an ideal woman

1. はじめに

「麗麗ス」⁽¹⁾は1933年に書かれた葉靈鳳⁽²⁾の短編小説である。主な登場人物は語り手の男性「私」と上海に暮らす「彼女」の二人で、題名の「麗麗ス」は作品中で彼女が語る物語の主人公である。この作品のあらすじは次のようなものである。クリスマスの前夜、華やかな都市の幸福そうな人波に消えていく彼女を見送って、私は家に帰る。私は窓外の闇の中に安らぎを求めてもがく彼女の魂を見たように感じ、彼女が語ったリリス⁽³⁾の物語を思い出す。彼女は生活の重圧に疲れ、都市を離れて平穩に暮らすことを望む一方で、憂鬱を忘れるために都市に刺激を求めずにはいられない。彼女は故郷や母の美しい思い出を抱えて都市で生きている。「私は孤独なさまよい人の寂寞を愛する」(p356)と言う彼女をリリスに重ね、私は彼女の苦悩に同情し、どこまでも彼女に寄り添いたいと思う。

リリスは神話・伝説では女性的な悪の存在であり、『聖書』では夜の魔女、『聖書』以降の文献では出産時の女性を襲い新生児を絞め殺す者、アダムの最初の妻、誘惑者などとされる。⁽⁴⁾ところが「麗麗ス」の中で「彼女」が語るリリスの物語はあくまでも美しく、葉靈鳳はリリスを魔女や誘惑者とする言説から切り離し、純潔な魂として描こうとしているように見える。それは何故なのか。またこの作品は純潔な心と孤独な性格を持つ美しい彼女をリリスに喩え、彼女の生き方に対する作者の理解と共感を表現したものであると考えられるが、それだけでは説明しきれない場面や人物を含んでいる。それらは何を意味しているのか。本稿では、神話や伝説に現れたり

キーワード：葉靈鳳、「麗麗ス」、アナトール・フランス、「リリトの娘」、理想の女性

*平成27年度生 比較社会文化学専攻

リスに係る言説を整理し、葉霊風が受容した西洋文学に描かれたリスの表象をたどり、「麗麗ス」の発想源がどこにあったのかを探るとともに、「麗麗ス」という作品及びそれとアナトール・フランスの「リリトの娘」との比較を通じて、そこから何が見えてくるのかを検討していく。

2. 神話・伝説におけるリス

リスは古代バビロニアの民間伝説が持つ邪悪な女性の精霊を起源とし、古代オリエント世界に広く伝播した。⁽⁵⁾ 人類史上最古の文学作品とされる『ギルガメシュ叙事詩』⁽⁶⁾の中に既に現れているとの主張もある。⁽⁷⁾『旧約聖書』では「イザヤ書」第34章14節にエドムの廃墟に憩う「夜の魔女」として現れているとされる。⁽⁸⁾『タルムード』⁽⁹⁾には翼と長い髪を持ち、性的な目的を持って男性に近づく悪霊として現れるが、リスはユダヤ教の教典より寧ろユダヤ神秘主義や民間信仰の中により多く現れている。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾ユダヤの伝承におけるリスは悪魔的な女性で、家庭生活や特に女性によって伝統的に重視される事柄を攻撃する者であり、新生児の生命や出産後の女性の健康を脅かし、夫を誘惑して妻から遠ざけるなどの役割が与えられている。⁽¹²⁾預言者エレミア⁽¹³⁾の母ベン・シラが語った話とされる『ベン・シラのアルファベット』⁽¹⁴⁾は、リスはアダムの妻になるはずであった女性で、アダムとの間に多くの悪魔を生んだとする。しかし彼女はアダムの下に横たわることを拒否し、対等を主張してアダムと争い、空へ飛び去る。神に遣わされた三人の天使が紅海でリスを発見し、戻らないならば毎日彼女の子供を百人殺すと脅迫するが、彼女は戻ることを拒み、自分の子供を失う仕返しとして、新生児を殺すようになる。⁽¹⁵⁾ユダヤ教神秘主義思想カバラ⁽¹⁶⁾の中心的書物『ゾーハル』は、リスはアダムの先妻で、エバが造られると追放されて男性を憎み、結婚を妨げ、子供を殺して魂と肉を食べる夜の悪魔になったとする。⁽¹⁷⁾13世紀のカバラの文献は、リスに悪魔サマエルの配偶者という新たな役割を与えた。⁽¹⁸⁾リスがアダムの先妻であるとされたのは『旧約聖書』「創世記」第1章27節の男と女が同時に造られたとする記述と第2章21節のエバがアダムの肋骨の一つから造られたとする記述の矛盾を解消しようとする試みであったとされる。⁽¹⁹⁾

こうして中世の西洋におけるリスは、アダムの先妻、夜に徘徊し、独り寝の男性を誘惑して虜にし、子供を襲って殺す魔女、悪魔の妻とされた。また、このような伝統を踏まえて、現代のフェミニストはリスを男性の支配に抵抗する者の象徴としている。⁽²⁰⁾

3. 西洋の作品に描かれたリス

近代西洋では多くの詩人、小説家、画家などが作品の中でリスを描いてきた。

ゲーテの『ファウスト』⁽²¹⁾には第1部「ワルブルギスの夜」⁽²²⁾にリスが登場する。この夜、ファウストはメフィストに連れられてハルツ山中に踏み込み、ブロッケン山で催される祭に駆けつける魔女たちの渦に巻き込まれる。ファウストが一人の女性に眼をとめて「あれは誰だ？」と尋ねると、メフィストは「よく見てごらんささい！リリトですよ」と答え、彼女はアダムの最初の妻で、美しい髪の魔力で若い男性を捕えて放さないから用心なさいと忠告する。⁽²³⁾この作品におけるリスの表象は、魅力的な美しい髪を持つ魔女、誘惑者である。

トーマス・マンの『魔の山』⁽²⁴⁾では主人公を魅惑する夫人がリスに喩えられ、リスはアダムの最初の妻で、アダムがエバと再婚したため夜の魔女になったこと、彼女の美しい髪は若者にとって危険であることが語られる。⁽²⁵⁾この作品におけるリスの表象は『ファウスト』に描かれた美しい髪の夜の魔女を踏襲するものである。

D.G.ロセッティ⁽²⁶⁾の長詩「エデンの園」⁽²⁷⁾は『旧約聖書』「創世記」第3章に記されたアダムとエバの楽園からの追放を詠んでいる。この作品のリスは黄金の髪をしている。楽園から追放された彼女は、アダムに復讐するために、蛇に姿を貸してほしいと執拗に頼み、蛇に姿を変えてエバを唆し知識の木の実を食べさせる。南條竹則は「ロセッティにとっての直接の発想源はゲーテ作『ファウスト』第一部である」⁽²⁸⁾と述べており、『ファウスト』の影響の大きさが窺える。一方松村伸一は「創世記に語られるアダムとイヴの楽園追放が、アダムの最初の妻であった美しき魔女リスの企てだとする解釈は、ロセッティのこの詩によって神話化したと言える」⁽²⁹⁾と述べ、「〈死をもたらす女〉の原型としてのリスは（中略）ロセッティ作品ばかりでなく、19世紀末文学の到る所に登場することになった」⁽³⁰⁾としている。ロセッティにはこのほか油彩画『レディ・リス』とそれに添えら

れた「肉体の美」というソネットがある。「肉体の美」におけるリリスは男性を虜にする魔女であり、『レディ・リリス』には長い金髪を梳きながら手鏡に映る自分の姿を眺める寛いだ姿の女性が描かれている。背景の白薔薇と赤い芥子は彼女の偽りの清純さと悪の本性を表すとされる。⁽³¹⁾

ヴィクトル・ユゴーはエジプト神話の女神イシスとリリスを混合したイシス・リリットという人物を創造した。『サタンの終わり』⁽³²⁾の中でイシス・リリットには「悪鬼の娘、イヴの前にアダムの妻であった、闇で作られた怪物」などの伝説に見られるリリスの属性が与えられ、父である悪の支配者サタンに代わって悪を実行する者として描かれる。⁽³³⁾

これらの作品がリリスを誘惑する魔女、意図的に男性を破滅させる女性とし、悪と結びつけているのに対して、アナトール・フランス⁽³⁴⁾の「リリットの娘」⁽³⁵⁾(1889)は全く異なるリリスの表象を創り出した。この作品のあらすじは次のようなものである。主人公のアリーは告解をするために恩師のサフラック司祭を訪れる。アリーは親友の恋人レーラに夢中になり、親友と自分の婚約者を不幸にし、結局自分もレーラに捨てられた事の顛末を語る。アリーからレーラの特徴を聞いた司祭は、彼女はリリスの娘で、アリーの体験はエバより前にアダムには妻がいたという自分の人類起源説の正しさを証明するものだと言い、リリスの故事を語る。この作品はアリーと司祭による外枠の物語の中に、アリーが語る彼とレーラの物語と司祭が語るリリスの故事が嵌め込まれた形をしている。司祭が語る故事では、リリスはアダムの最初の妻であったが、アダムに従わず自らエデンの園を逃げ出す。彼女はアダムが原罪を犯す前に彼から離れ、神の呪詛を免れたため、もとより救いを必要としない存在であり、彼女のすることには善も悪もない。彼女は神秘的な結婚によって数人の娘を産んだが、彼女たちも自分の行為や思想に縛られることはない。この故事の中で、リリスは善悪を知らない無垢な者であり、魔女でも誘惑者でもない。この作品からアダムの最初の妻を再評価する動きが起り、この作品が創り上げたリリスの表象から、彼女は最初のフェミニストであるとされ、フェミニズムの象徴となったと指摘される。⁽³⁶⁾

4. リリスを描いた作品の葉靈鳳による受容

アナトール・フランスの「リリットの娘」が敬隠漁によって翻訳されるなど⁽³⁷⁾、中国にもリリスの物語は紹介され受容されてきたが、その影響は大きかったとは言えない。その中で目立つのが葉靈鳳のリリスの物語に対する執着である。

葉靈鳳は随筆「麗麗斯的故事」の中で、多くの詩人がリリスの物語を題材にしてきたと述べ、ゲーテの『ファウスト』とロセッティの「エデンの園」を例に挙げている。この随筆は1938年の香港移住後に彼が新聞のコラムに発表したものではあるが、以下の事実から「麗麗斯」を書いた1933年には、既に『ファウスト』と「エデンの園」におけるリリスの表象を知っていたと考えられる。ゲーテの作品は1920年以前に文言を用いて多くは英語、日本語からの重訳で中国に紹介され始めたが、1922年に上海泰東書局から郭沫若訳の『若きウェルテルの悩み』が出版されたことにより、文壇にゲーテ・ブームが巻き起こった。『ファウスト』第1部はやはり郭沫若によって翻訳され1928年に出版されている。⁽³⁸⁾ロセッティに対する葉靈鳳の愛好は、彼がまだ上海美専の学生だった1920年代半ばに始まる。郁達夫によってイギリスの小説、散文に対する興味を芽生えさせられた彼は、酷く貧乏だったにも関わらず古本屋巡りが習慣になり、安い洋書を手に入れては読んでいた。その中にロセッティの詩集もあり、それを手に入れた時には「ほとんど「寝食を忘れる」くらい嬉しかった」と「我的蔵書的長成」の中で述べている。⁽³⁹⁾その「麗麗斯的故事」の中で、彼は『ファウスト』について、「『ファウスト』第1部の「ワルプルギスの夜」の一場面にもリリスが現れている」と述べた後、メフィストがファウストに注意を促す場面を郭沫若の訳文を引用して紹介している。また「エデンの園」については、リリスがエバに復讐するために如何に蛇を説得したかが描かれていると述べている。⁽⁴⁰⁾

アナトール・フランスは辛辣な風刺と鮮明な人道主義を特徴とされると言われる。⁽⁴¹⁾1921年にノーベル文学賞を受賞したことから中国の文壇で注目され⁽⁴²⁾、20年代から30年代初頭にかけて主な作品のほとんどが中国語に翻訳された。⁽⁴³⁾葉靈鳳も「死刑志願」を訳して秋生の筆名で発表している。⁽⁴⁴⁾フランスの「リリットの娘」について葉靈鳳が直接述べた文章は未だ見たことがない。しかし彼は随筆「法朗士的小説」の中で「一時期私はアナトール・フランスの小説を非常に愛読し、買い求められる限りの彼の小説を探し集めて、一冊一冊貪るように読んで

いった。こうして彼の三十数冊の小説のほぼ五分の四を読んだ⁽⁴⁵⁾と述べている。彼はフランスの優れた点を「物語を巧妙に処理する手法と常ににじみ出る文章の風格の精緻さ」⁽⁴⁶⁾であるとしている。また随筆「愛書家的小説」の中では「シルベトル・ボナールの罪」を好きな小説の一つとし、ボナールは幼時から本を愛する環境の薫陶を受けたフランスだからこそ書けた人物であると述べ、愛書家を自負する彼のフランスに対する親愛を表している。⁽⁴⁷⁾

ここまで見てきたように、リリスは古代バビロニアの女性的な悪の存在を起源とし、ユダヤ教、キリスト教の主流から排斥され、伝承されるうちに、アダムの最初の妻で、自分を貶める者から逃避し、復讐のために男性を誘惑し、子供を殺す魔女になった。多くの西洋の作品が彼女を誘惑する魔女として描き、ロセッティは更に、純真さを装い、誘惑した男性を黄金の髪で縊り殺す、死をもたらず悪女とした。但しアナトール・フランスのリリスの表象は異なる。フランスはリリスをアダムに反抗してエデンの園を飛び出した無垢な者として描いた。葉靈鳳はこれらの作品に原書、英語訳、中国語訳を通して触れ、受容したものと考えられる。

5. 先行研究における「麗麗ス」への言及

葉靈鳳の「麗麗ス」に言及した先行研究は多くはないが、以下の例が挙げられる。羅執廷、伍茂源は、アダムに服従することをよしとせずエデンの園を離れたリリスは、個性の自由を得た代償にエバのような女性になる、母親になる資格を失ったとし、葉靈鳳はリリスに似た現代女性を描くことで、リリスという意象を借りて個性の自由と愛の幸福は両立しないという追い詰められた女性の境遇を暗示したと述べている。⁽⁴⁸⁾ 葉靈鳳は確かに現代女性の苦悩に着目している。しかし作者はエバであろうとリリスであろうと、女性が生きることには犠牲が伴うということを知りたいのだろうか。また曾陽晴は「麗麗ス」は『聖書』創世記のエバの物語を書き改めた小説で、「パイロットと恋人との間の詩のような愛情の交流を書いている」⁽⁴⁹⁾と述べ、リリスを用いて散文詩のような愛情小説を創作し、男性に従属せず、且つ男性と付かず離れずの男女関係にある都会の女性を表現したとしている。⁽⁵⁰⁾ しかし「麗麗ス」はパイロットと、彼と付かず離れずの関係にある都会の女性との愛情物語なのだろうか。確かに「麗麗ス」第1節は長距離飛行中のパイロット「彼」が、炉の火を守る恋人から遠く離れた上空で操縦桿を握りながら、目の前で微笑む運命に立ち向かっている場面から始まる。パイロットが「私」を比喻したものであることは小説の最後に「私は、あの暗夜を飛行している冷静な気持ちで、静かに運命の挑戦を待っている」(p356)と語られるためわかるのだが、なぜ場面が上空に設定されているのか、炉の火を守る恋人は誰なのか、彼女を登場させる意味はどこにあるのかは最後まで明らかにされず、読者の解釈にゆだねられている。

6. 葉靈鳳の「麗麗ス」とアナトール・フランスの「リリトの娘」の類似性

葉靈鳳の「麗麗ス」とアナトール・フランスの「リリトの娘」には四つの類似点がある。

一つ目は物語の形式である。二作品とも粹物語の形を採り、リリスの物語は「麗麗ス」では上海の女性である「彼女」が語る物語内の物語に、「リリトの娘」ではサフラック司祭が語る物語内の物語になっている。

二つ目はリリスの物語のテキストそのものの類似と、そこで語られる内容の類似である。以下に例を挙げる。(類似箇所を同種の下線で示す。)

エバはアダムの肋骨で造られ、彼に属するものであったが、リリスはアダム同様黄土から造られ、独立し、アダムに属さず、また誰にも属さなかった。(葉pp353-354)

アダムの肋骨のひとつでつくられずに、アダム同様赤土でつくられた彼女は、したがってアダムの肉の肉ではなかった。(フランスp87)

人の世の罪業に染まらなかったため、彼女は宇宙開闢の時の混沌の純潔を持ち続けた。彼女は死なず、老いず、彼女は悩みを知らず、苦しみを知らない。

同時に、彼女は何が幸福であるかも知らない。(葉p354)

アダムはその時分まだ罪を知らない無垢の身だったが（中略）そんなわけだから彼女は、われらの最初の父が犯したあやまちにはなんの関りもないし、原罪によっていささかも汚されてはいないのだ。したがってエバとその後裔に向かって発せられた呪詛からも免れているのだ。苦しみも知らなければ、死も知らない。（フランスpp87-88）

第2節で見たようにリリスの伝説は長い時を経て形成されたものであり、それを語ろうとすれば内容が似るのは当然であるかもしれない。しかし上の例からわかるように、リリスを魔女、誘惑者とする言説を採用してきた西洋の文学伝統に対して、アナトール・フランスと葉靈鳳は大きく異なり、彼らの作品におけるリリスは、独立した、無垢な、不死の女性である。更に両者の間には以下に述べるような偶然とは思い難い類似点がある。

三つ目の類似点は「麗麗斯」の「私」と「彼女」の物語と「リリトの娘」の中でアリーが語るアリーとレーラの物語の人物設定に係るものである。第5節で述べたように、「麗麗ス」の冒頭は、パイロットが炉の火を守る恋人から遠く離れた上空で、目の前で微笑む運命に立ち向かっている場面から始まり、次のように続く。

運命の掌中から奪い取った悲哀には、平穏な幸福の中にいるのとは比べることのできない味わいがある。そのため、私は手に捧げて私の目の前に差し出された幸福を払って、運命が張り巡らした陣の中へ軽々と踏み込んだ。（p352）

この語りの意味は「リリトの娘」のアリーの告白を参照することによって、より明らかにできるように思う。アリーは親が自分に妻を持たせようと決め、自分もそうすることに同意して、一人の娘を紹介される。家が決めた結婚ではあるが自分もその相手が気に入る、婚約する。婚約者は「世間の親たちが普通こうした場合に望む取柄を残らず備えて」（p78）いる上に「縹緞もいい」（p78）。アリーは彼の「生涯の幸福と休息が、これでまず保証されたように」（pp78-79）感じる。しかし親友ポールを訪ねて婚約の報告をした時に、ポールの恋人レーラと出会ったことが、アリーの平穏な将来を一変させる。アリーはレーラに夢中になり、親友を裏切り、婚約者を苦しめることになる。「私」もアリーも約束された幸福を捨て、運命的な出会いをした女性に惹かれていく。

「麗麗ス」の「彼女」はリリスの物語を語った後に次のように言う。

もしもあなたがこの世の中で美しい娘に出会い、彼女が純潔な心を持ち、同時にまた孤独な性格を持っていたとしましょう。からかいからではなく彼女はあなたに苦痛を与え、吝嗇からではなく彼女はあなたに幸福を与えたことがない。あなたがもしもそんな娘に出会った時には、その娘はもしかしたら……（pp353-354）

自分をリリスに喩えたように聞こえる彼女の言葉は、リリス或いはリリスのような女性は、純潔な心と孤独な性格ゆえに人を苦しめ不幸にしてしまうが、彼女には決して悪意はないのだと言っている。

一方、「リリトの娘」でアリーは次のように語る。

僕は女なしではいられなくなり、女が逃げてゆきはしないかと、いつもビクビクしていました。レーラには、われわれが道徳観と呼ぶものが微塵もありませんでした。しかしだからといって、意地のわるいことをしたり残忍な態度を見せたりしたと考えてはなりません。それどころか反対にものやさしく、いたって慈悲深い女でした。（pp84-85）

アリーは既成の枠に囚われないレーラの自由奔放さに翻弄されたが、彼女は決して酷い女性ではなかったと言っている。これらの類似点から、「麗麗ス」の「私」はアリーに、「彼女」はレーラに、そして炉の火を守る恋人はアリーの婚約者に重なって見えてくる。「麗麗ス」は「リリトの娘」に着想して書かれた小説で、「彼女」はリリス—レーラに相当し、炉の火を守る恋人はエバ—婚約者に相当するのではないだろうか。こうして見ると「麗麗ス」冒頭の場面は、パイロットに喩えられた「私」が地上で炉の火を守るエバのような女性ではなく、上空で宇宙をさすうりリスのような「彼女」との愛情に踏み込んでいこうとする場面を表していると解釈できるので

はないだろうか。

では、葉靈鳳は何故「リリトの娘」から「麗麗ス」を着想したのだろうか。第4節で言及した「麗麗斯的故事」の中で、葉靈鳳は『ファウスト』の訳文を紹介した後、リリスがその長い髪で若者を仕留めたら決してすぐに手を放したりはしないという詩句は、「伝説のリリスは若者を誘惑したがる魔女でもある」⁽⁵¹⁾ということだが、「これは明らかに正教会の人士が故意に彼女を辱めたものである」⁽⁵²⁾と述べ、「リリスの物語は本当は美しい物語なのだ」⁽⁵³⁾と結んでいる。ここで葉靈鳳は二つの不服を述べている。一つはリリスの表象を誘惑する魔女とした作品に対する不服、もう一つはその原因を作った教会に対する不服である。

「リリトの娘」の中でリリスが悪女として描かれていないことは第3節で既に述べた。ここではリリスの娘、レーラがどう描かれているかを見ていきたい。アリーはレーラに会った時の印象を「女は僕の目に自然とは映らなかった」(p80)と言い、その「燃えるような流れるような全身に、(中略)人間とは縁もゆかりもないあるものを感じ」(p80)たと語る。フランスはアリーに「ごつごつしているとはいっても調和的なからだの線の戯れ」、「目に見えない翼がついているようにも思われるムキ出しの腕」(p80)のように、伝説のリリスの形象を継承しつつ彼女の身体的特徴を語らせているが、それは彼女が人間とは異なることを言うためであって、それによって彼女に誘惑する魔女という表象を与えていない。アリーは結局彼女の「肉感的でもあり同時に天界のものでもある嗜欲」(p82)の虜になってしまうのだが、彼女の方は恋の何たるかも知らない。アリーを捨ててペルシアへ戻っていく時、レーラは護符のようなものを置いていく。それにはエバの娘と同じように、生を味わうために死を、喜びを得るために悔恨を与えてほしいという神への祈りが刻みつけられている。彼女の祈りからは神秘的な存在であるがゆえに孤独な女性の姿が立ち現れてくる。西洋の作品が多く採用したリリスの表象に不服であった葉靈鳳は、フランスが創り出したリリスとレーラの、美しく、純潔で孤独な女性という表象に共感した。

葉靈鳳は作品中に彼自身が愛情という面で理想とする女性を描いていると言われる。例えば、純愛小説「浪淘沙」(1926)では「淑華は階段を軽やかに上っていき、西瓊は後に従った。彼女のたおやかな後ろ姿と少女のような動きをする時に特有の趣を見て、西瓊は思わず心の落ち着きを失った—ああ、美しい！」(p10)と女性の挙措の美しさを賛美し、「処女的夢」(1928)では男性登場人物が、「私に会いに来る見知らぬ女性は大勢いる。けれどもこんなに無邪気で嘘偽りがなく、人と人との間に全く隔たりのない快さを感じさせられたことはこれまでにない」(p48)と女性の率直な性格に感動する。「長門怨」(1935)の男性主人公は「とりわけあの時彼女は純潔無垢な少女であったため、防御することなく心を開き、少しも躊躇せずに私の愛を受け入れた」、「彼女は決して無感情な或いは無感動な人間ではなく、彼女の少女の秘密の心の中に地心のような流体の炎を隠し持っていた」(pp381-382)と恋人であった女性の純潔さと一途さを楽しみじみと回顧する。葉靈鳳は女性の姿の美しさ、心の純潔さ、秘めた強さを作品の中で高く評価している。⁽⁵⁴⁾「リリトの娘」におけるリリスとレーラの表象は、彼のこうした嗜好を満ちし、リリスの表象を誘惑する魔女とした西洋作品に対する不服を解消するものであった。

四つ目の類似点は教会に対する不服に係る。「リリトの娘」のサフラック司祭は『聖書』には書かれていないことがあると考え、彼の人類起源説を大司教に提出するが、不健全なものとして却下される。「麗麗ス」の終盤には、眠らない都市に響く不相応に美しい教会の鐘の音と騒々しく聖夜を過ごす人々が描かれる。そして作品の最後には「1933年12月24日夜」(p356)と記され、聖夜にエバではなくリリスの物語を書いたという設定にされている。ここから、二作品には主流の教会の権威に対する不服と懐疑という共通点があると思われる。葉靈鳳は「『聖經』的新訳本」で自分は無神論者であり、『聖書』を物語として、文学作品として読んでいるため、『聖書』を読むことは好きだが教会に行こうとは思わないと述べている。⁽⁵⁵⁾また「愛的講座」(1928)では聖職者の恋愛を描き、戒律や儀礼に拠って男女の愛情を非難する教会や教徒を風刺している。

7. 「麗麗ス」に見られる葉靈鳳の独自性—「リリトの娘」との相違点

ここまで「麗麗ス」と「リリトの娘」の類似性について述べてきたが、二作品にはまた相違点もある。まず、フランスがレーラの身体的特徴(顔・身体)を描写しているのに対して、葉靈鳳は「彼女」の身体的特徴を全く描写していない。ただ「私」が窓越しの夜の闇の中に彼女の「霧のような愁いに覆われた眼」(p353)を幻のように見るだけである。私は彼女に対する愛情を次のように表明する。

そうだ。私は幸福を必要としない、喜びを必要としない人なのだ。

そのために私はあの霧に包まれたような愁いを帯びた澄み切った眼を愛する。あの憂鬱な低い微かな歌声を愛する。そのために私はなおいっそうあんなにも純潔な心を、あんなにも流浪する魂を愛する。(pp354-355)

葉霊鳳は「彼女」をただ純潔な魂として描こうとしているように思われる。「私」の「彼女」に対する愛情の結末もアリーのレーラに対するそれとは異なっている。アリーが告解をすることで疚しさを悔恨に変え、レーラへの恋を思い出にしようとするのに対して、私はあくまでも彼女に同情と共感を寄せ、彼女が何度も繰り返す「私と知り合うと、あなたを苦しめることになるわ」という言葉を受け入れ続ける。第6節に挙げた自分をリリースに喩えたような彼女の言葉を聞いた後、私は「リリース、純潔な流浪する魂よ。どうか私に惜しみなく苦痛を与えておくれ。私は幸福を必要としない人だから」(p354)と祈り、「あなたを苦しめることになる」(p356)と言う彼女に対して、「そうだ。私はとうに知っていた。しかし私は決して恐れない」(p356)という私の語りで作品は結ばれる。アリーがレーラに翻弄されたのとは対照的に、私は自分の意志で彼女を選び続けているように思われる。

8. おわりに

ここまで検討してきたように、「麗麗ス」と「リリトの娘」を比較することによって、葉霊鳳はフランスが創造した純潔無垢なリリースの表象と教会の権威に対する不服と懐疑に共感し、それに触発されて「麗麗ス」を書いたと考えられる。葉霊鳳は「彼女」を都会の汚れに染まりきることなく純潔さを心に保ち、意志的であり、独立していて、しかしそのために孤独な美しい女性に描き、「私」をそうした女性と運命的に出会い、苦痛も不幸も厭わずに彼女に愛情を捧げ続ける男性に描いた。これは、葉霊鳳が憧憬する一つの男女の姿の表現なのではないだろうか。

注：

- (1) 本稿で使用した「麗麗ス」及び葉霊鳳の小説作品のテキストは、賈植芳 銭谷融主編『葉霊鳳小説全編 上』学林出版社（1997）に拠る。テキストの引用頁番号は本文中に示す。
- (2) 葉霊鳳（1905-1975）は南京出身の作家、編集者、愛書家。鎮江の教会付属中学校卒。上海美術専科学校在学中に小説を書き始め、1925年創造社に加入。編集事務を執りながら創作する。葉霊鳳の創作期間は、純愛小説やフロイト理論を運用した性心理分析小説を書いた早期、左翼小説を書こうとした時期、1932年以降モダニズム小説家に転身した時期の三期に分けられる。抗戦期に夏衍が主宰する上海『救亡日報』で抗日宣伝工作に従事し、新聞社とともに広州に移る。1938年広州陥落直前に家族の住む香港へ行って帰れなくなり、1975年死去するまで香港に住む。（賈植芳 銭谷融主編『葉霊鳳小説全編 上』学林出版社（1997）pp1-4参照。）
- (3) リリースはリリトとも呼ばれるが本稿ではリリースを用い、エバは新共同訳聖書に準じてエバを用いる。但し何れも西洋作品の翻訳など引用をする場合は引用元の表記に従う。
- (4) 荒井章三 山内一郎監修『聖書大事典』新教出版社（1991）p1012参照。
- (5) 長窪専三『古典ユダヤ教事典』教文館（2008）p564参照。
- (6) 実在の王ギルガメシュの波乱万丈の物語。シュメール人を起源とする。アッシリア、バビロニア人が政治的優位に立ち、シュメール人の文字体系、神話、文学を吸収する過程で長編物語にまとめられた。（矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩』筑摩書房（1998）pp010-011参照。）
- (7) Siegmund Hurwitz: *Lilith the First Eve: Historical and Psychological Aspects of the Dark Feminine* DAIMON VERLAG（1999）pp48-50参照。
- (8) 『旧約聖書』「イザヤ書」第34章は神によるエドムの滅亡を預言し、廃墟と化したエドムには汚れた動植物が棲むとされる。14節は次の通り。「荒野の獣はジャッカルに出会い/山羊の魔神はその友を呼び/夜の魔女は、そこに休息を求め/休む所を見つける。」（『新共同訳旧約聖書』<https://www.bible.or.jp/read/titlechapter.html>（2019.12.2検索）。）
- (9) 『旧約聖書』に次ぐユダヤ教の教典。紀元前2世紀から5世紀までのラビ（ユダヤ教聖職者）たちが主にモーセの律法を中心に行った口伝とそれに対する注解、解釈から成る。（『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』<https://kotobank.jp/word/タルムード-94775>（2019.12.2検索）参照。）
- (10) ジョルダノー・ベルティ著 竹山博英、柱本元彦訳『天国と地獄の百科』原書房（2001）p375参照。

- (11) ベルシアの善悪二元論が唯一神論を強調するユダヤ教に排斥されたことによって、悪の存在の影響は主流のユダヤ教の中にも残りはしたが、却って多くの神秘主義的な伝説や民間話を生み出したとされる。(デイヴィッド・ゴールドスタイン著 秦剛平訳『ユダヤの神話伝説』青土社 (1992) p58参照。)
- (12) Alan Humm <http://jewishchristianlit.com/Topics/Papers/Lilith.pdf> (2019.1.19検索) 参照。
- (13) エレミア (B.C.7C-B.C.6C) はエルサレムに住んだヘブライ人の預言者。
- (14) シラ書の著者ベン・シラの伝記をパロディー風に述べ、彼に帰された格言をアルファベット順に並べた6C半ばから11Cに成立した文書。(長窪専三『古典ユダヤ教事典』教文館 (2008) p459参照。)
- (15) 井村君江「リリス」『世界大百科事典』平凡社 (2007年改訂新版) p730及び同 (11) pp60-62参照。
- (16) 「伝承されたもの」を意味する。聖書やタルムードの本文に対する解釈を基盤とする神秘思想。長い間秘技とされた。最も有名な書物が『ゾーハル』である。(エレン・フランケル著 ベツイ・P・トイチ画 木村光二訳『図説ユダヤ・シンボル事典』(2015) 悠書館p58参照。)
- (17) 井村君江「リリス」『世界大百科事典』平凡社 (2007年改訂新版) p730参照。
- (18) は (11) に同じ。p62参照。
- (19) ゲルショム・ショーレム著 小岸昭、岡部仁訳『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局 (1985) p225参照。
- (20) は (16) に同じ。p301参照。
- (21) ゲーテ (1749-1832) はドイツの詩人、小説家、劇作家、自然科学者、美術研究者、政治家。『ファウスト』第1部は1806年完成、1809年刊行された。(『万有百科大事典1 文学』小学館 (1973) p204参照。)
- (22) 4月30日の日没から5月1日未明までの夜を指し、各地から魔女が集い饗宴を催したと言われる。(浜本隆志『魔女とカルトのドイツ史』講談社現代新書 (2004) pp212-215参照。)
- (23) 『ファウスト』の引用は柴田翔訳 J.W・ゲーテ『ファウスト』講談社 (1999) p246、内容はpp230-247参照。
- (24) トーマス・マン (1875-1955) はドイツの小説家、評論家。『魔の山』は1924年に出版された長編小説で、ドイツ教養小説の伝統に則って書かれた彼の代表作。(『万有百科大事典1 文学』小学館 (1973) pp618-619参照。)
- (25) 『魔の山』の内容は高橋義孝訳『新潮世界文学34 トーマス・マンII』新潮社 (1971) pp349-355に拠る。
- (26) ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (1828-1882) はヴィクトリア朝の英国の詩人画家。1848年にラファエル前派兄弟団を結成。(南條竹則・松村伸一編訳『D.G.ロセッティ作品集』岩波文庫 (2015) pp345-347参照。)
- (27) 1870年『詩集』に初出、1881年『詩集新版』掲載時に一部変更。
- (28) (29) (30) は (26) に同じ。(28) はp200。(29)、(30) はp367。
- (31) 「肉体の美」の内容は同 (26) pp114-115、「エデンの園」はpp185-200に拠る。油彩画『レディ・リリス』(1872-1873) は同 (26) p116及びアサヒグラフ別冊第20巻第8号美術特集西洋編29『ロセッティ』朝日新聞社 (1994) pp91-92に拠る。
- (32) ユゴー (1802-1885) は仏国の詩人、小説家、劇作家。ロマン派隆盛の契機を作った。『サタンの終わり』(1886) は「人類の歴史と宇宙の生成を独自の理想と想像力によって再構成し」た詩作の一つ。(『世界大百科事典29』平凡社 (1988) p20引用及び参照。)
- (33) 大橋寿美子「ユゴーのイシス・リリット」『同志社女子大学学術研究年報』第29巻Ⅲ (1978.11) pp52-62参照。引用はp54。
- (34) アナトール・フランス (1844-1924) は仏国の小説家、詩人、評論家。古書店の息子に生まれ、父親から書籍に対する愛好心を教えられた。『シルベトル・ボナルの罪』(1881) によって小説家としての名声を得る。初期の作品は懐疑と厭世を典雅な教養で包んだ独特な味わいを持つがドレフュス事件以降政治や社会への関心を深め、社会主義に接近した。(篠沢秀夫『フランス文学案内』朝日出版社 (2001) p102参照。)
- (35) 本稿で使用した「リリットの娘」のテキストは、アナトール・フランス著 水野亮訳「リリットの娘」『アナトール・フランス小説集6 (バルタザール)』白水社 (2000) に拠る。テキストの引用頁番号は本文中に示す。敬隠漁訳「李俐特的女兒」のテキストと照合したところ、本稿に取り上げた箇所に関しては大きな相違はない。
- (36) は (10) に同じ。p376参照。
- (37) 敬隠漁訳「李俐特的女兒」は『小説月報』16巻1号 (1925) pp1-10に掲載されている。
- (38) 饒鴻競等編『創造社資料上』福建人民出版社 (1985) p445参照。
- (39) 葉靈鳳「我的藏書的長成」「晚晴雜記」『讀書隨筆』三集 三聯書店 (1988) pp7-8参照。引用はp8。
- (40) 葉靈鳳「麗麗斯的故事」「霜紅室隨筆」『讀書隨筆』二集 三聯書店 (1988) pp324-326参照。引用はp326。
- (41) (42) (43) 許鈞、宋学智『20世紀法国文学在中国的訳介与接受』湖北教育出版社 (2007)。(41) はp14参照。(42) はp26参照。(43) はpp23-24参照。
- (44) 秋生「死的幸福」『戈壁』第1巻第4期 (1928.6) pp229-234。
- (45) (46) 葉靈鳳「法朗士的小説」「讀書隨筆」『讀書隨筆』一集 三聯書店 (1988) p52。
- (47) 葉靈鳳「愛書家的小説」「書魚閑話」『讀書隨筆』三集 三聯書店 (1988) p255参照。
- (48) 羅執廷 伍茂源「論葉靈鳳小説的意象建構」『名作欣賞』(2011年5期) p112参照。

- (49) (50) 曾陽晴「葉靈鳳小説關於基督宗教之文本的研究」宋如珊 魏美玲編『2010海峽兩岸華文文学學術檢讨会論文選集』中国現代文学学会。(49) はp125。(50) はp126参照。
- (51) (52) (53) は (40) に同じ。p326。
- (54) 葉靈鳳が描く女性について、黄文麗は「愛情に対して一様に一途で変節しない」とし（「葉靈鳳小説創作中の女性意識」『徳宏師範高等専科学校学報』（2010年第4期第19巻p59)）、賀姣は容姿が美しく、若く、恋愛経験が多くなく、純真で、しかし男性に盲従せず、愛情に対して独立した考えを持っていると述べている（賀姣「浅析葉靈鳳在1931年的短編愛情小説特色」『青春歲月』（2014年11期）p17参照）。
- (55) 『『聖經』的新訳本』『霜紅室隨筆』『讀書隨筆』二集 三聯書店（1988）p327参照。